

比喩の意味における

喩辞と被喩辞の相互関係について

李 徳 奉

1. はじめに

比喩の意味の成立においての喩辞と被喩辞の役割に関する、Richards (1936) や Black (1962), Ortony (1979) などの「相互作用説 (interaction view)」¹⁾というのは、比喩の意味は被喩辞 (topic) を喩辞 (vehicle) に置き換えただけではなく、両方の相互作用によって新しく成り立つという考え方である。芳賀 (1990) は、喩辞と被喩辞の意味の変化の程度を意味微分法によって喩辞と被喩辞の相互作用による結果を立証している。楠見 (1987) も、比喩における情緒・感覚的意味 (affective meaning) は被喩辞が喩辞によって強く影響されるということを証明している。Black によると、メタファーの意味は、辞書の意味ではなく、喩辞の連想された通念の体系 (system of associated commonplaces) に導かれて喩辞についての合意の体系を構築するものと言っている (pp. 40f から要約)。比喩の相互作用を説明するには、この意味の構築過程を具体化することによらなければならないと思われるが、筆者の狭い見聞による限り、相互作用の具体的内容についての研究は未だに見当たらない。

そこで本稿では、まず聞き手が比喩文から読みとる意味とはどういう性質を持った意味なのかを調べてから、そのような意味は「喩辞」および「被喩辞」とどういう関係をもっているものかを見ることによって、比喩の意味における相互作用の実態に迫ってみたい。本稿で言う意味とは人間の物や事柄に対する経験の総体としての抽象的なものではなく、発話の行為の中で聞き手が直接受け取った具体的なものを指す。こういう考え方は、「言葉はそれだけでは何物も意味しない、思考者がそれを使用して始めて意味を持つようになる」といった Ogden & Richards (1936) の考え方に基づくものである。このような具体的な意味を分析する方法としては、連想 (association) 法を用いることにする。ここで用いる連想とは、語と語の間の連合である言語連想 (word association) のことを意味する。Deese (1965) によると、意味とは個々の言語形式に対して人間が行い得る諸反応の分布であるが、実際にはそのような反応全てを知ることはできないから、近似的に個々の語に対する自由連想を求めたいわゆる連想的意味 (associative meaning) を調べることによって、意味の最もおおきな部分集合を知ることができるということである。本稿でも、聞き手が比喩文からどういう連想をするかを調べることによって比喩の意味を具体化してみた

[1] Ullmann (1959) は文の意味を「語彙の意味」と「文法の意味」とに分けて説明している。

い。本稿の具体的な狙いは次の二つである。まず、比喩の連想語を語彙の分類体系に沿って語彙分類を行い、比喩の意味を成す連想の語彙の特徴を把握する。それから連想語が元々の喩辞・被喩辞の意味とどういう関係にあるのかを見ることによって、喩辞と被喩辞の相互作用の実態を把握する。とりわけ被喩辞が喩辞に及ぼす意味影響に注目し、喩辞・被喩辞・連想語の三者間の意味関係を図式化することによって比喩の意味構造における三者の関係を明らかにしたい。

2. 研究方法

1. 実験材料

連想実験には下記の4種類14の例文を用いる。刺激文1～3は、喩辞と被喩辞を成す単独語によるもので、比喩文になる前の語単独の連想を調べるためのものである。4、5、6、10、11、13は、被喩辞に具体的文脈を与えられていあい比喩文で、喩辞と被喩辞だけによる結合によって形成される意味を調べるためのものである。7、9、12は、被喩辞に具体的文脈を与えた比喩文で、同じ被喩辞が別の文脈を持つことによって意味がどう変わるかを調べるため、8、14は喩辞と被喩辞を置き換えた比喩文で、喩辞と被喩辞が逆になった場合の意味変化を見るためのものである。

喩辞に対する被喩辞の意味役割を見るために、「犬」といった共通の喩辞を、異なった文脈を与えた「女」「男」などの被喩辞に結び付ける。「犬」を喩辞に選んだのは、先行研究(芳賀・李・李, 1989)において犬は日本人の最も親しい動物となっていて、比較的連想しやすい対象と見なしたからである。

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1, 犬 | 9, 新婚ホヤホヤの彼女が主人のことを |
| 2, 女 | 友人に言いました。彼は犬のようです。 |
| 3, 男 | 10, おじいさんは犬だ。 |
| 4, 学校は犬だ。 | 11, 女は犬だ。 |
| 5, 男は犬だ。 | 12, 80才のおばあさんが主人のことを |
| 6, サラリーマンは犬だ。 | 友人に言いました。 |
| 7, 私の彼女はすぐ怒りがちなので | うちのおじいさんは犬のようです。 |
| 彼女が大きな声で怒っている | 13, 愛は犬だ。 |
| 時なんかは彼女は犬のようです。 | 14, 犬は男だ。 |
| 8, 犬は女だ。 | |

実験方法としては、上記14の刺激文をそれぞれ一枚の紙に一文ずつ記し、項目の前後関係による影響を最小限にするために提示の順番をランダム法によって作られた四通りの設問紙が用いられた⁽²⁾。記述方法としては、一文当たり30秒間自由連想をさせ、語または短い句によって記す方法を取った。実験の対象は、筑波大学社会工学類2年生52名

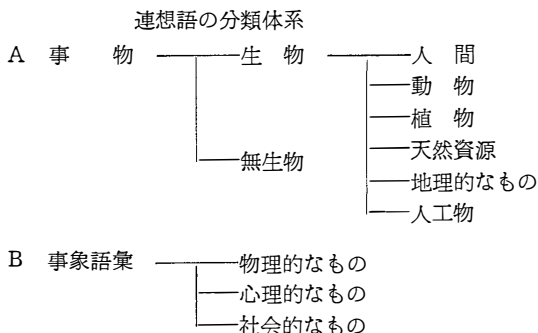
(2) 質問紙の指示文: 次の各文は、物事の特徴を述べたものです。各文を読んで「～は」の部分の物事の様子や特徴など思い浮かべたことを順に「単語」または「短い句」でお書きくださるようお願いします。一文当たり30秒の間隔で進めますので進行係の指示に従って一文ずつお進めくださるようお願いします。品詞の制限はありません。

(男子：46名，女子：6名)を対象に教室で集団テスト方式で行われた（実施日：1988. 12. 21）。

2. 分析方法

収集された語または句の分類においては，語彙の分類体系に従って連想語一つ一つの頻度を算出することにする。句の場合は，分類の便宜上，中心になる語を用いて語に書き換える。例えば，「上司にペコペコする」「男は強がりばかり言う」を「ペコペコ」「強がり」に書き換えて全てを語単■に整えるなど語彙の分類を行なうことにする。

語彙の分類体系に関する従来の研究は，辞書作りのために Trier (1931; Ullmann 1962, p. 278参照), Halig & Wartburg (1952) らによって試みられて以来，Lyons (1963), Southworth (1967), Nida (1975) らによってかなり具体化されている。日本においても栗原 (1969), 岡田 (1969), 長尾 (1986, p. 76f), 成瀬 (1989, p. 44ff) などによって早くから体系化が試みられている。しかし，語彙の体系化というのは，言語によって，また体系化の目的によって違ってくるゆえ，全ての語彙を分類できるような体系法はまだ成り立っていないといっても過言ではない。現在のところ最も細部に亙った体系といえる成瀬 (1989, pp. 44-46) の場合，意味素を大きく「固体・集合体・現象・概念・属性・行為・動き働き」の7つに分けているが，集合体の場合，人間の集合体しか分類されていないことや「概念」の項目が他と重複の可能性があること，属性の中に形状や状態まで含まれているなどの問題がある。本稿の目的に合った，比喻における連想語のための語彙体系にするためには，「比喻の根拠」の多くの部分を占める属性・形状・価値評価・情緒などにより重点が置かれなければならない。そこで本稿では，指示的分類に詳しい Nida (1975, pp. 178-186) の体系と，属性・行為などの分類に詳しい成瀬の体系を参考にして，連想によく登場する関連語彙の項目を新しく設け，下記のような体系を作ってみた。ただし，この体系は連想語の語彙の属性を調べるという非常に限られた目的のために作られたものなので，語彙全体の体系のための検証までは行われていないことと，それゆえ各項目とも例外の項目が設けられなければならないことを断わって置きたい。





収集された連想語の語彙的特徴を掴むためにこの語彙体系を用いて連想語を分類してみ
るわけであるが、語彙分類上の誤差を少しでも減らすという意味でD Eは同じ範疇に入れ
て分類することにする。例えば、「犬」の連想語の「速い」の場合、Dの属性、Eの絶対
的評価、關係的評価いずれにも分類できるので、分類上の重複を防ぐためにいっそ同一範
疇に入れて扱うことにしたい。

3. 結果及び解釈

1. 連想語の語彙体系的特徴

連想語の分類に入る前に文例別連想語の多寡を見るために連想語の数を文例別に示して
みると表1の通りである。

1つの刺激文に対する一人当たりの連想語数は平均1.5語であるが、文例によって反応
語数はかなりの差が出ている。単独語の自由連想文である文例1, 2, 3, の場合は一文当
たり平均103の連想語の反応を示しているのに対して、比喩文である文例4以下の場合
は、平均74語を連想している。これは、単独語の自由連想より比喩文の方が意味的により狭

表 1 文例別連想語数

＼文	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
被 喩 辞	*	*	*	a	男	b	c	犬	彼	d	女	e	愛	犬	*
喩 辞	犬	女	男	犬	犬	犬	犬	女	犬	犬	犬	犬	犬	男	*
連想語延数	111	105	95	60	81	84	88	71	81	64	70	77	63	72	1122
無回答者数	1	2	2	11	5	1	2	8	5	13	8	4	9	5	76名

*: 該当無し a: 学校 b: サラリーマン c: 彼女 d: おじいさん e: うちのおじいさん

く具体化していることの反映ではないかと思われる。また比喩文の中でも「男」と「犬」の結びつきである5, 6, 9の場合は連想語が多いのも連想し易かったからだと思われる。同じ「女」との結びつきでも文例11より文例7のように具体的比喩の根拠が与えられている場合の方が連想語の数も多い。とりわけ反応語数の少ない4, 8, 10, 11, 13, 14の場合(連想語数の平均67語)は、決められた時間内に連想反応を示せなかった無連想者の数が5~13人に登る。無連想者が多いということは、理解しにくい文であったとも読み取れる。連想語が少なかったということは、喩辞と被喩辞の間の関連性が低いため共通の喩根を見つけだすことが用意でなかったとも解釈される。

連想語1122語全体の語彙分類体系における分布をみると、Aの事物類が28例、Bの事象類が50例、Cの形状類が195例、D・Eの属性・評価類が689例、Fの関連語彙が160例で、形状、属性・評価に関する語がほとんどを占めている。関連語彙は意味にはならないので、これを除いた残りの962語中、形状・属性・評価類の語が91.9%を占めている。本稿の比喩例に限って考えた場合、比喩文の連想的意味は形状・属性・評価に関するものがほとんどと言える。今回の刺激文の場合は属性的意味を表している文例が多いゆえ相対的に形状語の比率が落ちてはいるものの、比喩文から連想される意味はほとんど属性・評価・形状に関する要素であることをよく表しているといえる。

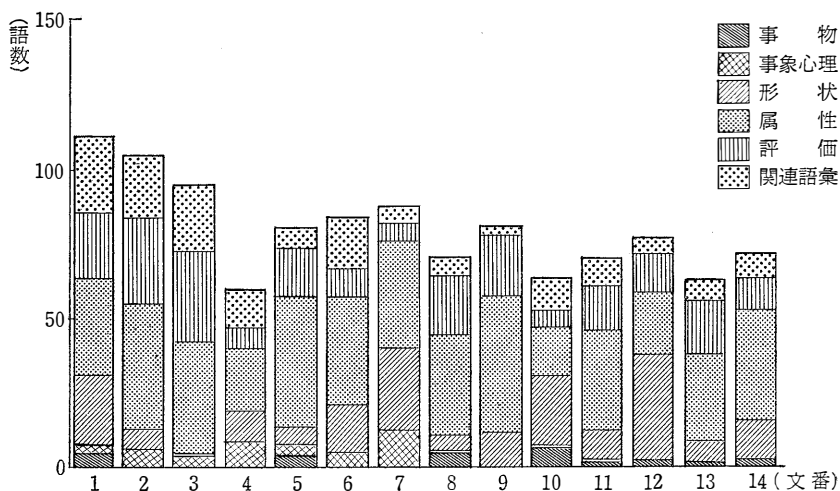
文例別連想語の語彙分類の分布を分かりやすくするため図示してみると図1の通りである。

上記のような数少ない比喩文から比喩一般の特徴を導き出すことはむずかしいであろうが、少なくとも強調的隠喩の意味に限ってはその特徴が十分現れていると思う。自由連想に近い1, 2, 3の場合、属性・評価に関する語が最も多く、その他は被喩辞が変わることによって形状、心理事象、事物の順に次第に連想語の傾向も変わっている。4以下の文例の場合にも、属性・評価に関する連想語が主流をなしているが、7, 10, 12の「彼女」「おじいさん」の場合には、形状的連想語の割合がかなり高くなっている。このようなことから、連想語の語彙分類の性格は、喩辞と被喩辞の関係、とりわけ被喩辞の文脈によってその傾向が決まるという大ざっぱな予想がつく。

2. 喩辞と被喩辞の意味影響関係

ここでは、本稿の主な論点である、比喩の意味を決める際においての喩辞と被喩辞の影響関係を調べるために、文例別連想語の内容を具体的に観察してみることにする。即ち、

図 1 文例別連想語の語彙分類体系



刺激語「犬」「女」「男」のような単独語に対する連想が、異なった文脈の被喩辞と一緒に喩文を構成するにつれ、どのようにかわるのかその推移をたどってみることによって喩辞と被喩辞の意味関係を調べてみようということである。そのためには、表1や図1に示されているような全ての連想語を対照させてみるといわけであろうが、連想語というのは個人的経験やさまざまな影響関係、理解力の違いなどの制約があるので、個人的傾向の強い意味影響を減らすために、一つの刺激文において頻度3以上の語だけを中心に比べてみることにする（3以上を最低線に決めた根拠は、全文の一人当たりの連想語数が前述した通り1.5語であるので2人以上の連想語にすることによって個人性をより少なくするためである）。同時に、「関連語彙」は直接喩の意味を成すと言うより、具体物を指したり、もう一つの喩になったりする場合が多いので、今回の意味関係の分析の対象からははずすことにする。こういう制限の下で選ばれた連想語の数は683語で全体連想語の61%を占める分である。これら連想語を前述した語彙分類の体系別に分けて文例ごとの頻度数をまとめてみると表2の通りである。

表 2 主な連想語の文例別出現度数

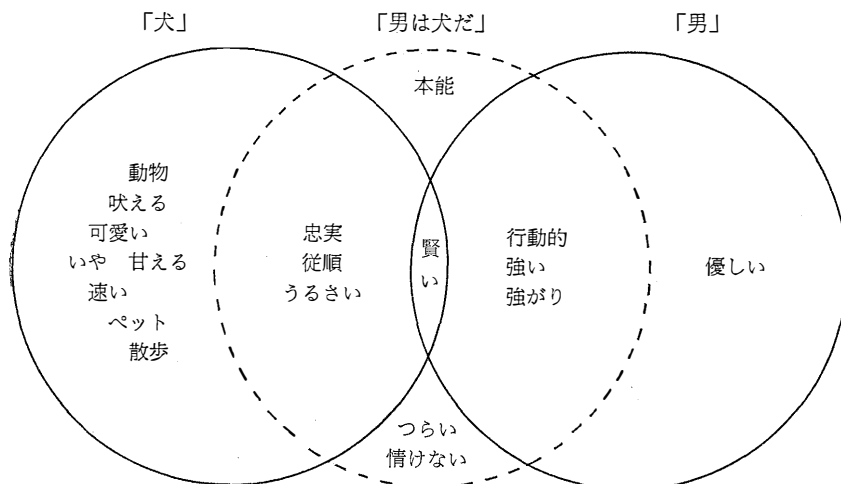
分類	連想語\文例	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
事物	動物・四つ足	5				1			1			1				8
	男		5													5
	女			8												8
	メス								4			1				5
	年寄り										7		1			8

分類	連想語\文例	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
事象・心理	いや	3		1		1			1							6
	好き		3	1												4
事象・心理	不思議		5	1												6
	面白い			1	3								1			5
事象・心理	つらい					3	1									4
	退屈				3											3
事象・心理	悲しい・可愛そう						4				1	1	1			7
	ヒステリ		2					11								13
形状	吠える	8	1			1		1	2	2	1	1			7	24
	散歩	4									2		2			8
形状	叫び							3								3
	ヨボヨボ										3		1			4
形状	キャンキャン							4								4
	甲高い							5								5
形状	小さい・丸い								1		3		1			5
	元気								1		1		5		1	9
形状	肌		3									1				4
	じっとしている										3		13			16
形状	甘える	1	1						4	9	1	2	1			19
	媚びる。じゃれつく	1	1		1					1		1		2		7
形状	使われる	1				1	5					3				10
	手先				9											9
属性・評価	本能・欲情		3			3			1	4				9	2	22
	行動的・逞しい	2		8		6	2			1	1			1	5	26
属性・評価	野生・野性					8			2			1			6	17
	闘争的・狂暴														7	7
属性・評価	忠実	6				4	15		2	8		3	1	3	3	45
	誠実					2				2			1	2		7
属性・評価	従順	6			1	5	7		3	6		3		1		32
	懐く	3							2	6		1	1			13
属性・評価	うるさい	4	9		5	3		27	5	2	3	10	10		1	79
	優しい		8	3					1	2	3			4		21
属性・評価	わがまま・強がり	2	7	7		5	1	2	1		2	1			2	30

分類	連想語\文例	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	計
評価	きれいな		10						1			1				12
	無力					1	3									4
	かわいい	8	7			1		1	9	4	1	2	4	3	1	41
	働き者					1	6			1		2			1	11
	強い	1	3	21		8			1	2					7	43
	弱い	1	1				2		3	2		2	1			12
	賢い	4	2	4		1	1		2		1					15
	おろか	2	2						1			4		1		10
	速い	4				1			1			1			2	9
	ペット	4							1	1		1				7
	短気							4		1						5
	情けない					2				4						6
合 計		70	73	55	21	59	47	58	50	58	33	43	44	26	45	683

表2から形状(127語)・属性・評価(474)に関する語彙の合計601語の全体的比率を見ると88%で、連想語全てによる表1においての91.9%とほぼ同じ傾向を示している。比喩の意味と、喩辞・被喩辞の本来の連想との関係をより分かりやすくするために表2に基づいて「犬」「男は犬だ」「男」と「女は犬だ」「女」の両グループの連想語の分布をベンの図で示してみると図2、3の通りである。⁽³⁾

図2 「犬」「男は犬だ」「男」の連想語の分布関係



(3) ベンの図による「比喩の意味構造図」の詳細については李(1989) p.9を参照されたい。

図 3 「犬」「女は犬だ」「女」の連想語の分布関係

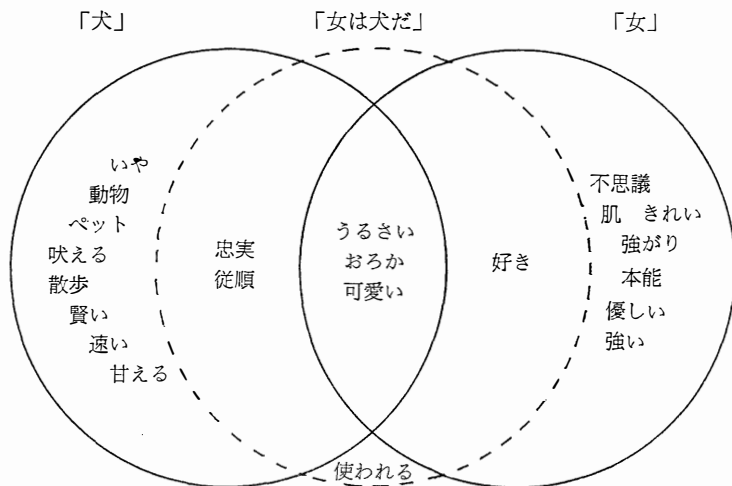


図 2・3 で分かるように、被喩辞の連想的意味は、「うるさい、おろか」のような喩辞と被喩辞の共通の意味と、「忠実、従順」のような片方の連想から選ばれた意味、「本能、つらい、情けない」のような喩辞・被喩辞どれも属していない新しい意味の三つのグループから構成されたい。このように比喻の意味は、元々から共通的であった意味はむしろ少なく片方の意味から選ばれた意味の方が主を成している。共通の意味だからといってすべて比喻の意味になるのではなく図 2 の「賢い」図 3 の「可愛い」のように連想から外される場合もあるので、比喻の意味は喩辞と被喩辞の共通の意味によって成り立つという従来の考え方は大ざっぱすぎるように思われる。言葉のレベルにおける共通点というより言葉以前の、片方の連想を刺激するような、属性の趣きのようなレベルにおける共通点であり、実際の比喻の意味になるのは被喩辞の文脈に合わせてかなり変形されたものである。ただ共通点によって比喻の意味が成り立つという言い方は誤解を招き安い。比喻文の連想語の構成を見ても被喩辞・喩辞の両方から選ばれていることが分かる。被喩辞・喩辞・比喻文の間における連想語の配置の様子を見るために、連想の頻度と合わせて示してみると次の通りである。(X：喩辞における連想の頻度，Y：比喻における頻度，Z：被喩辞における連想の頻度)

「男は犬だ」グループ			
	X	Y	Z
a 忠 実	(6, 4, 0)		
b 従 順	(6, 5, 0)		
c うるさい	(4, 3, 0)		
d 強 がり	(2, 5, 7)		
e 行 動 的	(2, 6, 8)		

「女は犬だ」グループ			
	X	Y	Z
a' 忠 実	(6, 3, 0)		
b' 従 順	(6, 3, 0)		
c' うるさい	(4, 10, 9)		
d' おろか	(2, 4, 2)		
e' 可 愛 い	(8, 2, 7)		

f 強い (1, 8, 21)

f' 使われる (1, 3, 0)

g 本能 (0, 8, 0)

h つらい (0, 3, 0)

i 情けない (0, 2, 0)

「男は犬だ」グループの連想語の a, b, c は喩辞「犬」の主な連想語であり, d, e, f は被喩辞「男」の主な連想語, g, h, i は派生した新しい連想語である。これら三通りの連想が得られた背景を元々の喩辞と被喩辞の連想語から考えてみると, 「忠実・従順」は「男」の「行動的」「働き者」というイメージと結びついており, 「うるさい」は「どんちゃん騒ぎ」や「おしゃべり」のイメージとの結びつきから選ばれたものと思われる。もちろん「うるさい」は犬のイメージにおいて「吠える・うるさい」がかなり高かったので, その影響も考慮せずにはいられないものの, 比較的頻度が低かったのは被喩辞「男」との結びつきの妥当性の弱さからだと思われる。主な連想語でありながら選ばれていない「甘える・可愛い・ペット」は男の「強い・逞しい・行動的」といったイメージとの結びつきが悪いからであり, 男の連想である「強がり・行動的・強い」が選ばれたのは「犬」の連想にもあったのでそのまま生かされたのではないかと思われる。このような連想結果から直喩文を作ってみると, 「男は犬のように従順だ, 忠実だ, うるさい」は自然な比喩文になるけれども, 「男は犬のように行動的だ, 強い, 強がりだ」は落着きが悪くなるように, 被喩辞側に目立つ連想を比喩の根拠にするのは適当でないと見えよう。なぜならば, 比喩の根拠を修飾しているのは喩辞であるから喩辞の連想語が根拠にならないと結びつきが悪くなるからであろう。また g, h, i の「野生・本能」というイメージは「犬」の動物性から引き起こされた新しい連想であり, 「つらい, 情けない」は繋がれている「犬」の立場から連想されたものと思われる。このように比喩の意味は喩辞の数多い連想の中から被喩辞との結びつきの可能性のある連想によって選別的に成り立つのである。即ち, すでに出来上がっている比喩文だけを見ると喩辞の意味が目立って見えるが, その意味に決めた役割は被喩辞にあると言えよう。それゆえ比喩の意味は喩辞によって決まるという一方的な言い方は成り立たない。

「女は犬だ」グループの場合, e' の「うるさい」という連想が最も目立つのは, 喩辞・被喩辞両方とも高い連想になっているからだと思われる。「犬」においての連想語の頻度は「吠える・うるさい」合わせて 12, 「女」では 9)。e' の「可愛い」は両方において高い頻度の共通の連想語であり, 結びつきの適合性からみても妥当な連想でありながら比喩文においては低い (2 回) のは, 「かわいい」という連想は「犬」や「女」の属性や形状というより見る側の感じであるゆえ「女は犬だ」のように属性をあらわすような文の意味には成れなかったものと思われる。しかしはっきりと「女は子犬のように可愛い」という風に表現意図が見る側の感じになっていれば自然な表現になれる。また, 頻度は低い「犬」側の a', b', の「忠実・従順」が連想されているのは, 女性の社会的地位に対する従来の認識の影響によるものと思われる。両方とも低かった d' の「おろか」の連想が男性の被験者に限って高くなっているのは喩えられる「犬」の動物性と女性に対する男性側の意識の

結びつきによるものであり、新しく派生した f' の「使われる」は飼われている「犬」と従来の女性の地位に対する意識との結びつきによるものであろう。

この喩辞と被喩辞の関係をよりはっきりさせるために喩辞と被喩辞を置き換えて「犬は男だ」「犬は女だ」にすると連想は次のように変わってくる。(x : 「犬」の連想, y : 比喩文の連想, z : 喩辞「男・女」の連想)

「犬は男だ」グループ

	x	y	z
吠える	(8, 7, 1)		
忠実	(6, 3, 0)		
野生	(0, 6, 0)		
逞しい	(2, 5, 8)		
闘争的	(0, 7, 0)		
強い	(1, 7, 21)		

「犬は女だ」グループ

	x	y	z
メス	(0, 4, 0)		
甘える	(1, 4, 1)		
弱い	(1, 3, 1)		
可愛い	(8, 9, 7)		
うるさい	(4, 5, 9)		
従順	(6, 3, 0)		

「犬」の連想である「吠える・忠実・従順」のうち、「犬は男だ」では「吠える・忠実」が、「犬は女だ」では「従順」が連想されているのは、男女の属性に合わせて選ばれたものと思われる。また「男」の連想語である「逞しい・強い」が比喩文の意味に選ばれているのも被喩辞が活発な動物であることに合わせた結果であり、「闘争的」という新しい連想が生じているのも喩辞の「強さ」と被喩辞の「動物性・吠える」などの融合によるものであろう。「犬は女だ」に「可愛い・うるさい・従順」の連想が目立つのは「女」の性分と「犬」の属性との結びつきから選ばれたものであり、「甘える」は「女」の「優しさ」と「犬」の「懐く」属性との結びつき、「弱い」は「犬」の「繋がれている・飼われている」という連想と「女」の「弱い」という連想との結びつきであろう。いずれの場合においても、比喩の意味を成す喩辞の意味を選択する際、被喩辞との結びつきが決め手になっている。

次に、喩辞の「犬」を固定しておいて被喩辞を替えた場合、連想語にどのような変化が現われるのかを見てみたい。被喩辞が「花婿の彼」(文例9)「サラリーマン」(文例6)「おじいさん」(文例10)「80代のおじいさん」(文例12)「怒る彼女」(文例7)「学校」(文例4)「愛」(文例13)などの場合、連想語の分布は次の通りである。(x : 「犬」の連想, y : 比喩文の連想)

「花婿の彼」		「サラリーマン」		「おじいさん」		「80代のおじいさん」	
	x y		x y		x y		x y
甘える	(1, 9)	忠実	(6, 15)	うるさい	(4, 3)	うるさい	(4, 10)
懐く	(3, 6)	従順	(6, 9)	年寄り	(0, 7)	可愛い	(8, 4)
忠実	(6, 8)	使われる	(1, 5)	ヨボヨボ	(0, 3)	元気	(0, 5)
従順	(6, 6)	可愛そう	(0, 4)	小さい	(0, 3)	じっとしている	
可愛い	(8, 4)	無力	(0, 3)	じっとしている			(0, 13)
本能	(0, 4)	働き者	(0, 6)		(0, 3)		
情けない	(0, 4)						

「怒る彼女」		「学校」		「愛」	
	x y		x y		x y
ヒステリ	(0, 11)	面白い	(0, 3)	欲情	(0, 9)
叫び	(0, 3)	退屈	(0, 3)	忠実	(6, 3)
甲高い	(0, 5)	手先	(0, 9)	可愛い	(8, 3)
キャンキャン	(0, 4)	うるさい	(4, 5)	優しい	(0, 4)
うるさい	(4, 27)			嬉しい	(0, 2)
短気	(0, 4)				

被喩辞が「花婿の彼」になると「犬」の「懐く」という連想との関連で「甘える、懐く」が目立つようになり、「犬」の動物性に合わせて「欲情」が連想されるようになる。「サラリーマン」の場合は職業柄「忠実・従順」がより目立つようになり、その置かれている立場から「可愛そう・無力・働き者・使われる」など「犬」にはなかった新しい連想が生じている。また「おじいさん」では、「犬」の「じっとしている」様子から「年寄り・ヨボヨボ・小さい・丸くしている」などが連想されている。同じ「おじいさん」でも奥様のおばあさんが話し手になると、「うるさい・元気」などの連想がさらに追加されるようになるのは話し手との関係によって具体化された被喩辞の意味の影響によるものと思われる。これは、話し手の年齢から被喩辞の「おじいさん」の年齢が推定できるであろうからそれに合わせての連想と思われる。同じように、「怒る彼女」という文脈が与えられるとそれに合わせて「犬」の「吠える」と「怒る彼女」が結びついて「叫び・甲高い・キャンキャン・うるさい」などが強調されるようになり、「学校」の場合は「手先」や「うるさい」が、「愛」の場合は「犬」の動物性が強調され「欲情・嬉しい」などの連想を引き起こす。つまりこれらの例は、被喩辞の意味が文脈や話し手によってより具体化されるにつれ、それに合わせて比喩文の連想も変わるという事実をよく現したものと言えよう。

これらの結果から見ると、比喩の意味における喩辞と被喩辞の相互作用というのは、喩辞の意味を決める際は被喩辞の意味に合わせてそれに適した連想だけを選別するものであり、被喩辞の意味はその選別された喩辞の意味によって具体化されるという相互の働きかけの役割を持つものと言える。言い替えれば、喩辞は連想の資料を提供するものであり、被喩辞はその資料から適当な意味を選ぶものであるということである。それゆえ、比喩の意味は、喩辞・被喩辞の類似点による置き換えや比較によるものではなく、両方の相互作用によって発生した新しい意味と言えよう。

おわりに

本稿では、「犬」を喩辞にした11の比喩文の意味が被喩辞によってどういうふうに変わるのかを連想法をもって調べてみたわけであるが、比喩から連想される意味は、ごく一部においてしか喩辞の連想と一致しないことと、そのごく一部の意味が選ばれる決め手になるのは被喩辞であるということが証明されたと言える。つまり、比喩の意味を、被喩辞が喩辞の意味によって具体化される面だけをみると、喩辞の意味からの影響が目立つけれど

も、そのような喩辞の意味が選ばれる段階においては被喩辞の意味との適合性に左右されその枠が決まるということである。この相互作用の結果、新しい比喩の意味が生成されると言える。

以上のように、比喩における喩辞と被喩辞の相互作用の具体的関係を連想法を用いて分析してみた結果、一貫性のある成果は得られたと言えるが、喩辞の例として「犬」だけが用いられたので今後理論を一般化するためには、より多くの例文による検証が必要とされる。

参 考 文 献

- Black, Max (1962) “Models and Metaphor” London, Cornell Univ. Press
- Deese, James (1965) “The Structure of Associations in Language and Thought” Baltimore, The Johns Hopkins Press
- 芳賀 純 (1990)「メタファーの定義と研究課題」『メタファーの心理学』誠信書房
- , 李 & 李(1989)「動物の食用性に関する心理言語学的研究」『関西心理学会第101大会発表論文集』
- Halg, R & Wartburg, W. von (1952) “Begriffssystem als Grundlage für die Lexikographie, Versuch eines Ordnungsschema, Abhandlungen der deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst
- 池上嘉彦 (1975)『意味論』東京, 大修館
- 楠見 孝 (1987)「比喩表現の現解過程：その認知心理学的分析」『表現研究』46, 1-12
- 国広哲彌 (1970)『意味の諸相』東京, 三省堂
- 栗原俊彦 (1969)「単語の意味分類モデル論的考察」『九州大学工学部集報』42-3
- Levin, S.R. (1977) “The Semantics of Metaphor” Baltimore, The Johns Hopkins Univ. Press
- 李 徳奉 (1989)「認知機能から見た比喩の意味構造」『言語学論叢』8
- (1990)「言語学における比喩研究の最近の動向から」『メタファーの心理学』誠信書房
- Lyons, J. (1963) “Structural Semantics” Oxford, Basil Blackwell
- Nida, E.A. (1975) “Componential Analysis of Meaning” Mouton
- 長尾 真 (1986)『機械翻訳はどこまで可能か』東京, 岩波書店
- 成瀬武史 (1989)『意味の文脈』東京, 研究社
- Ogden, C.K. & Richards, I.A. (1936; 52) “The Meaning of Meaning” 10th ed., N.Y. Harcourt Brace Jovanovich
- 岡田直之 (1969)「自然語の意味情報とその抽出および分類」『電子通信学会論文誌』c52-10
- Ortony, A. (1979) “Metaphor and Thought” London, Cambridge Univ. Press
- Southworth, F.C. (1967) 'A Model of Semantic Structure' Language 43-1 pp. 342-361
- Stroik, T.S. (1988) “The Pragmatics of Metaphor” Indiana Univ. Linguistics Club
- Ullmann, S. (1959) “The Principles of Semantics” Basil Blackwell and Mott Ltd
- (1962) (池上嘉彦訳; 1969)『言語と意味』東京, 大修館
- Wately, R. (1863) “Elements of Rhetoric” N.Y. Harper

(筑波大学博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)